若 き 友 へ

2003 年 4 月 28 日
経済学部教授　髙島　均

所感 03－3　あるベトナム帰還兵の死――― A Death of One Vietnam Veteran

ミシガン州は、三方を湖に囲まれた州です。一番長い距離を接しているのは、ミシガン湖です。そのミシガン湖の南東に、ホーランド Holland という、小さな市があります。ホーランドは、その名前が示すように、オランダ Holland からの移民によって、19 世紀半ばに作られた町です。尤も、それよりも 100 年以上前に、カトリックの宣教師達がこの地を訪れ、原住民インディオにキリスト教を布教しておりましたが、白人が居住区を作るようになったのは、オランダからの移民が来てからです。オランダからの移民たちは、信仰生活を守っていくために教会を、子供達のために学校を作りました。ホープ・カレッジは、オランダからの移民が、子供達に高等教育を施すために作ったカレッジです。従って、ホープ・カレッジは、オランダ改革派教会に属するプロテスタントの人たちを中心に作られたわけですが、カトリックの人々も、大学で重要な地位に多数ついていますし、学生の 25%、一説には 40%が、カトリック教徒です。

明治学院大学の起源の一つは、明治時代に、日本に布教に来たオランダ改革派教会の宣教師達が設立した私塾ですので、明治学院大学は、ホープ・カレッジと特別に緊密な関係を持ってきました。即ち、学生の相互交換だけでなく、教員の相互交換も行ってきました。私は、2002 年度の明治学院大学交換教授として、ホープ・カレッジに派遣され、その後も、客員研究員として滞在しています。ホープ・カレッジでは、経済学科(正確には、経済・経営・会計学科)に配属されましたので、毎日、経済・経営そして会計領域の先生達と顔を合わせています。カレッジが小さいので、学科はもっと小さく、本当に一つの家族のようです。クリスマスには、夫婦同伴で学科主任の家に行って、パーティーを楽しみます。一時的な滞在者にすぎない私達夫婦に対しても、新しいメンバーとして接してくれます。その中で、顔をあわす度に、一日に何回でも声をかけてくれる人がいました。それが、Dr. Kendrick Gibson でした。

11 月 11 日は、Veteran's Day といって、アメリカ社会の平和と名誉のために、命をかけて戦った兵士達を記念するための日、即ち、既に亡くなった兵士達に感謝し、生存している

退役軍人をねぎらう記念日です。その、Veteran's Day に、Ken は、研究室の扉に大きなベトナム南部の地図を張り出していました。Ken の風貌は、私とほぼ同年代の感じでしたので、ひょっとしたら、Ken は、ベトナムに行った(兵士として)のかもしれないと思いました。いつか、Ken に、ベトナムに行ったのかどうか聞いてみたいと思っていました。しかし、気楽に聞ける話ではありませんので、今学期も終わって、ゆったりしたところで、お茶でも飲みながら、聞いてみようと思っていました。

今年の聖木曜日(キリストの最後の晩餐の記念日)、私は、ミサの時間を 1 時間早く勘違いしてしまい、早めに研究室を出ました。すれ違いざま、Ken が "See you tomorrow, Hitoshi." といってくれた時、"See you."とだけ返事をして別れました。というのは、翌聖金曜日 Good Friday は、色々な行事が次から次へとあって、仕事もしようとすると、非常にあわただしいので、研究室には来ないつもりだったからです。聖木曜日 Holy Thursday から復活徹夜祭 Easter Vigil に至る 3 ヵ日 Triduum の行事は、とても感銘深いものでした。

月曜日、大学に行って、Ken が、土曜日に心臓発作で急死したことを知りました。

Ken は、私が想像したとおり、ベトナム戦争の退役兵でした。それも、空挺部隊の青年将校としてベトナム戦争に関わったのです。帰国して、何年たっても、その悪夢から抜け出すことが出来なかったようで、何年もまともに授業が出来なかったことがあったそうです。時々、「私は、自分達が何をやっているのか、本当に知らなかった。ただ、国家の命令を果たすためだけにやっていた。」といって、泣き叫ぶことがあったそうです。自殺を図ったこともあったそうです。

第 2 次世界大戦中からのベトナムの民族統一と独立を求める抗仏闘争は、フランスに代わって自由社会の盟主を名乗るアメリカが、" 南ベトナムの共産化を阻止する "ために自ら戦争に乗り出し、南ベトナム解放戦線を相手とした戦闘のみならず、労働党(共産党)政権が支配する北ベトナムへの猛烈な北爆を始め、60 年代には対米戦争に代わっていました。当時徴兵制をしいていたアメリカは、多数の前途ある青年達を戦場に送りましたが、他方、国内では、反戦運動が公民権運動と絡みながら、全米に広がっていきました。
ベトナム反戦運動は、アメリカ国内に留まらず、フランス・ドイツ・日本をはじめ、世界の多くの国において、それぞれの国における固有の問題と絡みながら、より自由な社会を求める運動として、その時代の青年達多数を巻き込んでいきました。しかし、単なる平和運動の枠を越え、現政権は勿論、既存の体制そのものに対して、本質的な radical 異議申

し立てを行ったこの世代は、どの国でも、社会の主流から脱落ないし放り出されてしまいました。今日、私達の世代で社会の表街道を歩いている人々の中に、私達の世代の中で 1 流だった人はいません。最も優秀であった人々、最も感性が鋭敏であった人々は、その優秀さ・鋭敏さゆえに、自ら傷つくだけでなく、社会総体から、忌み嫌われたのです。他方、ベトナム戦争を体験したアメリカの兵士達が、ベトナムシンドロームと呼ばれる後遺症に苦しみ、戦後、容易に社会に復帰できなかったことは、よく知られています。世界中、どの国でも、戦地に行くにしても反戦運動の形で関わるにしても、私達の世代にとって、ベトナム戦争こそが青春でした。私達は、ベトナム戦争世代なのです。

個人的な立場や見解はともかく、ベトナム戦争に何らかの形で関わった私達の世代は、精神（こころ）と身体（からだ）に癒しがたい大きな傷を受け、その後の人生を送ってきました。私もまた、官憲から受けた暴行の結果死んだり、自ら命を絶ったり、気が狂っていったり、あるいは、その後の党派闘争の中で死んでいった、多くの仲間を見てきました。私は、これらの仲間は国家によって殺されたと思っています。私自身、官憲から受けた暴行が原因で、第 3 腰椎が 2 つに裂け、しかも大きくずれてしまい、整形外科医からは、いずれ下半身不随になると予告されています。私が、大学教授として、何とか社会にしがみ付いていられるのは、学生時代、私が尊敬していた指導者が、「髙島君、他人と一回り(4 年)以上ずれては駄目だ。一回り以上ずれると、他の学生の気持ちが理解できなくなる。」「大学だけは、出ないと駄目だよ。」といってくれたおかげです。他人が 4 年で卒業する大学を、8 年かけて卒業しましたが。

私達は、ともに同じ空気を吸い、ともに笑い、ともに泣いた多くの仲間の屍を踏み越えて生きてきました。それは、ベトナムで、ともに同じ空気を吸い、ともに、笑い、泣き、おびえ、喝采を叫んだ青年兵士達が、多くの亡骸を越えて生きてきたのと同じです。ベトナムで戦った青年も、ベトナム反戦運動を戦った青年も、いずれも、かけがいのない青春に、自ら選んだ生き様の中で、かけがえのない仲間を失い、その屍を越えて生きてきたのです。しかも、自分のしてきたことには、果たしてどれだけの社会的意味があったのだろうかという、恐ろしい自問を抱えながら。

「大量破壊兵器を保有し、核兵器開発に野心を持つフセインを、イラクの支配者の場から引き摺り下ろし、イラク国民に平和で自由な社会を与えるため」に、核兵器を実際に戦争で使用し、今なお核兵器を多数保有し、核実験を続けているアメリカが、イラクに大量破壊兵器を用いて侵入し、イラク国民が選んだ政権を暴力的に打倒し、その軍事的支配を背

景に、今後のイラク社会の樹立に大きな役割を果たそうとしていることを、ベトナムでの経験を、悪夢として過ごしてきた、心優しき Ken は、天上から、どのような思いで見つめているでしょうか。

4 月 23 日(水)、Ken の葬儀が教会で営まれました。立派な樫の木の棺に入った Ken の遺体は、大きな星条旗に包まれていました。私は、それを、当然だと思いました。ベトナム戦争に Ken を往かせた国家を、Ken がどのように思っていたか知りません。しかし、少なくとも、国家は、Ken の愛国心と滅私の奉仕に、そして、その後引き受けなければならなかった精神的苦悶に対し、充分な敬意を表すべきだと思います。遺体を包んだ大きな星条旗は、葬儀の後、遺族に引き渡されるそうです。
Ken に、ベトナムでの経験を聞く機会は、永遠に失われてしまいました。

心優しき Ken は、まるでこの日を知っていたかのように、一つのメッセージを残しました。それは、とても美しい詩で、それ故に、涙をこらえることができませんでした。Ken の葬儀が終わった翌 4 月 24 日、事務室の誰かが見つけて配ってくれたのでしょう、メールボックスに、Ken が、何かの論文で何かの理由で引用した詩のコピーが入っていました。

Christmas in Heaven
(Author unknown)

I see the countless Christmas trees,
Around the world below,
With tiny light, like heaven's stars,
Reflecting on the snow.

This sight is so spectacular,
Please wipe away that tear,
For I am spending Christmas
With Jesus Christ this year.

I hear the many Christmas songs,
That people hold so dear,
But the sound of music can't compare,
With the Christmas choir up here.

For I have no words to tell you,
The joy their voices bring,
For it is beyond description
To hear an angel sing.

I know how much you miss me,
I see the pain inside your heart,
But I am not so far away,
We are really not apart.

So be happy for me, dear ones
You know I hold you dear,
And be glad I'm spending Christmas
With Jesus Christ this year.

I send you each a special gift,
From my heavenly home above,
I send you each a memory
Of my undying love.

For after all "Love" is the gift,
More precious than pure gold,
It was always most important,
In the stories Jesus told.

So please love and help each other,
As my Father said to do,
For I cannot count the blessings
Or the love He has for you.

So have a Merry Christmas,
And wipe away that tear,
For I am spending Christmas
With Jesus Christ this year.

I can't tell you of the splendor,
Or the peace, here in this place.
Can you just imagine Christmas
With our Savior face to face?

I'll ask Him to lift your spirit,
As I tell Him of your love,
So then pray for one another
As you lift your eyes above.

So please let your hearts be joyful,
And let your spirits sing.
For I'm spending Christmas in heaven,
And I'm walking with the King!